

## 大学院と一体化したプロフェッショナル・コースの創設を

SFCは、幸いにも日本における大学のあり方を方向づける上で大きな役割を果たしてきた。しかし、SFC自身がなお十分に対応できていない面がいくつかある。そのうちの大きな課題の一つは、卒業生の国際的な活躍という意味での「国際化」だろう。これは、学部卒業生に関してだけでなく、残念ながらSFC大学院（政策・メディア研究科）の卒業生についても同様だ。

何も、直ちに海外で働く卒業生それ自体を増やすことを目標にする必要があるわけではないが、国際的に通用する力量を備えた学生を送り出すことは、SFCが引き続き大学教育改革をリードする限り、目指すべき方向といえる。つまり、高度の専門知識やリーダーシップを備えた若い人材育成のための制度整備は、SFCにとって次の段階に位置する大きな課題である。

### 提案するプログラムとその特徴

それに対応する仕組みはいくつか考えられるが、一つの有力な方向は、SFCの学部と大学院を一体化した五年半ないし六年制大学院のコースを一つの基幹プログラムとして創設することだと思う。

そのコースでは、卒業学位（修士号）に大きな価値を持たせるため、学生には在学中に国内あるいは海外で九か月ないし一年間のフルタイムの実務経験を義務づけることを大きな特徴とする。従来の大学院卒業生は、SFCの政策・メディア修士も含め、とかく実務経験が不十分であるため修士の資格に十分見合った待遇に恵まれないという問題があった。この新しい構想はその点を改善し、専門知識と実務経験を併せ持った高度のプロフェッショナル、あるいは新しいエリートの養成を目指すプログラムだ。

### 国際的にも存在する類似のプログラム

こうした仕組みは、国際的には特に目新しいものではない。筆者が昨年（一九九九年）義塾の交換教授として一時滞在する機会を得たフランスのある名門校（グランゼコールの一つであるエセック経済学経営学大学院）は、まさにこうした観点から学部と大学院を一体化したプログラム（経営学修士MBAコース）をその根幹に据えて高等教育を展開している。

フランスの教育制度はかなり複雑であるが、あえて日本の制度に引き直して同校の方式を理解するならば、大学一年生（十八歳）相当からの三年間は強烈な集中教育を実施し、その後四年生相当時には、大学から完全に離れて六か月ないし一年間、企業等でインターンシップ（フィールドワーク）を実施させる。それが終了すると（つまり大学院一年生相当時に）再びこの大学での勉強に復帰させ、その後の二年間は勉強と再度（三～六か月）の上級インターンシップが積み重ねられる。つまり、大学入学後五年半ないし六年間で非常に有用な修士号が取れる仕組みになっている。

### プログラム成功のための三条件

SFCでこうした新しい高等教育を展開するには、三つの条件が必要になるろう。

第一は、学部入学に際して通常のコースとは別にこのための独立した修士コースを新設することだ。例えば、現在のSFC両学部の定員（現在は合計約九〇〇名）のう

ち一定数は従来どおり学部卒業を前提に入学させるが、残りの一定数は、当初より五年半ないし六年の修士コースの特別学生として入学させることが考えられる。

第二は、六か月ないし一年間のインターンシップ（フィールドワーク）をこのコースの中心の一つに据える一方、インターン学生を受け入れてくれる民間企業や各種組織（公的機関、NGO、国際機関）を国内外を問わず積極的に開拓、整備することだ。これには、相当努力を要しようが、幸いにも塾生OBが国内外で幅広く責任ある地位に就いて活躍しているので、その協力を期待できよう。ちなみに、上記のフランスのエセック大学院では、日本に常駐事務所を開設してインターン学生受入れ先日本企業の開拓に力を入れている。

第三には、学生がともすれば漫然と過ごすことの多い夏休み期間を積極的に活用させ、この間にインターンシップ（あるいは学科科目の履修）など学位取得に直結する活動がっちりと組み込ませることだ。このためには、学期区分を現在のセメスター（二学期）制からトライメスター（三学期）制あるいはクォーター（四学期）制に切り替えて、学位取得および施設利用の効率化をすることも検討する必要があるかもしれない。

社会のエリートを意味するプロフェッショナルの学位に至る道は、学生にとっても当然厳しい。しかし、SFCはそのための制度を創設し、新しい時代が求める国際競争力のある学生を育てるべきだと思う。

（慶應義塾大学 Keio SFC Review、六巻、二 年三月）